

「東京大学総長賞」受賞者・団体紹介

【学業】

※上から賞状・記念品の授与順となる

◎総長大賞

	吉田 樹生	人文社会系研究科・博士3年
	<p>【A Grammar of Ghale (『ガレ語文法』)】</p> <p>現在、地球上で話されている約7000の言語の多くが消滅の危機にあり、言語の記述と記録は学術的・社会的に重要な課題である。本研究では、ネパールで話される少数民族語ガレ語を対象として、現地での調査に基づき当該言語の包括的な文法書を作成した。収集したデータをアーカイブすることで、将来的な二次利用も可能となった。本成果は、言語研究の基盤となる一次データを提供するとともに、言語の保全にも寄与することが期待される。</p>	

○総長賞

	斉藤 咲太郎	工学部・4年
	<p>【光応答性筋組織で駆動する四足歩行ロボット】</p> <p>光刺激で収縮を制御できる培養筋組織を用いたバイオハイブリッドロボットの研究に取り組み、従来は柔軟基板の曲げによる「這う」運動にとどまっていた光駆動ロボットを、脚を持ち上げて歩行する四足歩行ロボットへ発展させた。筋組織をリング状に拮抗配置し関節構造を工夫することで筋収縮を脚運動へ変換する機構を開発し、前進・旋回を実証した。本成果は複数の国内外学会で発表・学術誌に出版され、世界的に高い評価を受けた。</p>	

	岩田 晴登	文学部・4年
	<p>【第一次世界大戦期イギリスの戦争目的と対ドイツ休戦交渉】</p> <p>第一次世界大戦後に構築されたヴェルサイユ体制はなぜ崩壊し、二度目の大戦を招いたのか。この問いを背景に、従来の研究が看過してきた休戦交渉という局面に光を当て、イギリスの戦争目的を軸とする独自の分析視角から戦後体制の形成過程を捉え直した。アメリカの外交的優位のみが強調されてきた従来の休戦像を覆し、休戦は単なる軍事行動の停止にとどまらず、戦後秩序の起点であったという新たな歴史的意義を提示した。</p>	

	富田 有香	農学生命科学研究科・修士2年
	<p>【バイオマス系多糖ナノファイバーの機能と活用法の開拓】</p> <p>生物資源である樹木やカニ殻を由来とする多糖ナノファイバーは、環境負荷が低く、生体適合性にも優れた次世代材料として注目されている。富田氏は、実験と計算科学を融合させることで、多糖ナノファイバーが水と油を安定に混ぜる「乳化」の仕組みを分子レベルで明らかにし、乳化性能を狙い通りに設計する道筋を示した。この成果は、石油由来の材料に依存してきた乳化技術を再生可能資源へと転換する可能性を拓くものである。</p>	

	中村 和貴	医学系研究科・博士課程 (2025年3月修了)
	<p>【膜組織に着目した腫瘍進展機構の解明と制御】</p> <p>口腔がんの骨浸潤は生命予後やQOLを悪化させるが、その詳細なメカニズムは未解明だった。氏は、口腔がんの接近に伴い顎の骨を包む膜が分厚くなり、物理的な「壁」となって侵入を食い止める現象を解明。非免疫系による新たな抗腫瘍機構を見出し、この新しい生体防御の仕組みはNature誌に掲載され国内外で高く評価された。本成果は、膜組織の防御力を高めてがんを封じ込めるといふ、従来の概念を覆す革新的な治療戦略を拓くと期待される。</p>	

【学業】

○総長賞

	陳 洪瑞軒	新領域創成科学研究科・博士課程（2025年9月修了）
	<p>【災害レジリエンスのための AI 駆動型地球観測データ解析の研究】</p> <p>災害時には、衛星画像による被害状況の把握が重要であるが、多様なセンサデータから実用的な情報を迅速に抽出する技術は未確立であった。陳氏は、構造情報に基づくデータ解析、地球観測特化型AI設計、ラベル効率的学習を統合し、全天候型の災害対応AIフレームワークを構築した。成果は博士課程中に主要国際誌・国際会議で発表され、ESIホットペーパー選出やIEEE国際コンテストの公式データセット採用など国際的に高い評価を受けた。</p>	

【課外活動・社会活動等】

◎総長大賞

	東大UmeeT	
	<p>代表：雨堤 若菜、緒方 麻明知</p> <p>【学生の運営するWebメディアを通じた、10年にわたる本学の魅力の発信及び学内交流の活性化】</p> <p>UmeeTは、「この大学は、もっと面白い。」を理念とするWebメディアである。様々な学生・教職員、部活・サークルに関する記事を発信してきた。また、寄稿という形で学生・団体を発信主体としても巻き込み、学内の発信・交流の場を提供している。こうした活動は、本学の魅力を学内外へ伝え、そのプレゼンスを向上させると共に、学内の多様な活動を繋ぐハブとしても機能し、本学への帰属意識の醸成、多様な課外活動の振興に貢献した。</p>	

○総長賞

	東京大学英語ディベート部	
	<p>代表：吉田 光太郎、土屋 なさ</p> <p>【オックスフォード・ケンブリッジ大学対抗戦での優勝・準優勝、および世界大会予選第6位等の成績】</p> <p>その場で発表される未知の論題に対し、わずか15分で論理を構築し英語で議論を交わす即興ディベート。高度な思考力と表現力が問われる中、ディベートの聖地オックスフォードとケンブリッジ両大学が主催する大学対抗戦のOpen部門(無差別級)にて英米の名門校を破り、日本史上初の優勝および準優勝を果たした。さらに1000名超が参加する世界大会でも世界6位・個人7位に入賞し従来の日本記録を大幅に更新した。</p>	

	東京大学工学部丁友会RoboTech	
	<p>代表：太田 優貴</p> <p>【国内・国際ロボットコンテストにおける優勝及びロボット技術を通じたチーム間交流の促進】</p> <p>東京大学工学部丁友会RoboTechは、学生主体で高度なロボット開発に取り組み、国内外のロボットコンテストで顕著な成果を挙げてきた団体である。2025年度にはNHK学生ロボコンで優勝し、日本代表として出場したABUアジア・太平洋ロボットコンテストでも優勝を果たした。さらに同団体はロボコンへの出場のみならず、イベントでの展示活動やチーム間交流を通じて、ものづくりコミュニティの拡大と発展にも貢献している。</p>	